IEEJ Industry Applications Society News Letter

電気学会産業応用部門ニュースレター 2008 年 7 月号（http://www2.iee.or.jp/ver2/ias/22-newsletter/nl_2008.html）

「Ｄ部門がやらずして....」

電気学会産業応用部門部門長
堀　洋一（東京大学）

2002 年 10 月 25 日に開催されたＤ部門役員会で，当時の四元部門長から，部門の将来の仕組みを検討するよう，指示があった。当時，運営委員会の副委員長をつとめていた堀がまとめ役となって，技術委員会の統廃合という観点の議論をしていた。部門長は，編修委員会の意見も大切だから一緒にやれ，という卓見を示され，両委員会の正副委員長６人で WG を作った。

技術委員会統廃合はうまくいかなかったが，技術委員会と編修（論文）委員会の関係強化が焦点であることが認識された。そこで新しい改革の骨子を以下のように再設定した。

（１）まず，学会の使命は論文誌の発行であることを理解し，乖離している技術委員会と編修委員会の活動を統一し，たとえば，年間 1000 件もの研究会論文を論文誌論文に吸い上げる。

（２）技術委員会のアクティビティのバランスをとる。基幹分野をカバーすると同時に，電気技術者が活躍できる新しい分野の取り込みや，そこへの進出を積極的に行う。

（３）国内に閉じない活動を目指し，国際化を真剣に考える。

こうして，技術委員会統廃合の議論は，部門活動全体のあり方をより高い立場から俯瞰する根本的なものに発展した。

その検討結果は，平成 16 年産業応用部門大会シンポジウム（高松）で，「Ｄ部門組織改善の新しい試み」として報告され，これが現在の仕組みにつながっている。シンポジウムの目次は下記の通りである。

０．概要　（四元勝一）
１．Ｄ部門の新しい仕組み　（堀　洋一）
２．論文委員会の改善
　２．１　エディタ制　（大西公平）
　２．２　査読プロセス　（村上俊之）
　２．３　論文誌の英文化　（堀　洋一）
３．編修委員会の改善
　３．１　新しい編修体制　（清水敏久）
　３．２　ホームページ　（久保田寿夫）
　３．３　ニュースレター　（星　伸一）
４．技術委員会活動の改善（石川忠夫，斎藤涼夫）
５．フリーディスカッション，まとめ

いまあらためてこのシンポジウムを振り返ってみれば，現在の３委員会体制の原点がここにあり，熱く語りあった仲間がそのまま部門の中核となっていることがわかる。とくに，大西部門長の作り上げたエディタ制や，斉藤部門長の独立採算への志向をそのまま踏襲し，よりクリアに推進したい。具体的には下記のようなことを考えている。

（１）論文集の充実。電子ジャーナルへのアクセス権をもつことが学会員資格と同意義となるだろう。IEEE Xplore に匹敵する JXplore（仮称）を立ち上げ，ネットからアクセスできる仕組みを早急に作る。

（２）すべてのベースとなる技術委員会の強化。斉藤前部門長が描いた，技術委員会の縦横マトリクスを実現させたい。シーズベースとニーズベースの委員会に分け，共同で

研究会を開催し，異分野間の交流を図る。技術委員会の視野を若年層へと広げ，門戸を広くしてベテランとの交流をはかってもらうべく，技術委員長とは真摯な議論をして行きたい。

（３）伝統的な技術分野とともに，新しい分野，とくに自動車や電池などの分野を取り込んで行きたい。電気で動き，電力ネットにつながろうとしている将来のクルマを電気学会が担うことはなんら不思議でない。専門学会ではかえって難しいという，自由な雰囲気の受け皿を作りたい。

（４）部門独立採算。産業応用フォーラムや部門大会で得る収益を部門内で活用する。たとえば，論文掲載料への補助，若手への渡航補助，若者向けのイベントなどの人材育成に使いたい。

（５）国際化。電気学会が内外から尊敬を得るにはどうすればよいか，という視点のもとに慎重に議論する。韓国，中国，IEEE との関係をどうしていくか，真剣に考えなければならない。場合によっては，国際化活動資金を有効活用しながら，大胆に実行していきたい。

電気学会の変革はＤ部門から行うという例をたくさん作りたい。行き過ぎた改革に走らないよう気をつけながら，明らかな無駄は省き，事務局がより生き生きと働ける職場になるようにもできればうれしい。むこう２年間，すこしまじめになって微力を尽くしたいと思っている。